

# 川の道フットレース

若木くるみ

かれこれ3、4年前のことでしょうか、超ウルトラに取り組みまもなくして、インターネットで川の道を知りました。どなたかの書いた、足指をメタメタに傷めながら完走した壮絶極まる川の道のブログを読んでから、その520キロというボリュームに呑まれたと思うようになりました。

ところが、おおきな夢であり憧れであったはずの川の道なのに、他の大会への出場を重ねる中で、情熱のパワーバランスを間違えてしまったというか、自分の情報処理能力を超えてしまったというか、川の道対策に充てる時間を持たぬまま、前日説明会に参加する車内で初めて大会プログラムを開きました。

我ながら、ナメてんの？ と言いたくなるようなまっさらのコースマップを広げ、カラーペンをお借りしながら懸命にマーキングしていきます。ラインをひくだけで一苦勞のこの距離を、走るのかあ。

大丈夫……な気がするもしないも全く想像つかないやばすぎる。520キロの、意味がわからん。

ぎりぎりに会場入りした座席の関係で、過去幾度も優勝されている吉岡さまとお話することができ、さらには「溺れるものは藁をも掴む」を地で行く図々しさで、吉岡さまオリジナルの大会詳細地図をコピーさせていただくことに成功しました。

コンビニまでの道中、

「意外にしゃべるんだね」

とか

「昨日どこ泊まったの」

とか

「なにそれ」

とか

……断片的な雑談に紛れて、

「画家なんだって？」

という衝撃の問いが鼓膜をさらいました。聞き間違いと思って流してみたけど、また聞こえた。現実でした。一体、なぜ……。

「へー、そうなんですか？ 知りませんでした」

とか茶化せたら良かったのだけどそんな余裕は到底なく、ただただ動揺するばかりでした。

「有名だよ」

ってそんなわけないじゃんそれ何調べよ！ と思ったけど、とにかく今は、吉岡先生に社会不適合者と認識されてしまった我が身が悔しく、どこぞの情報提供者に制裁をと神に願いました。

一方そんな吉岡先生は自らの職業は決して明かしてくださらず、どうやら彼もまた闇の稼業に従事しているようでした。

これから飲み会だとおっしゃっていたので、ああ悪い仲間たちとたのしく飲むのだなと思っていたら、コンビニでビールをいそいそと買っておられました。ホテルでひとり召し上がるそうです。大会前夜なのに。全く、理解に苦しみます。

その晩、知人宅でコースマップを切り貼りして、せっせと予習に励みました。22時就寝の予定でしたが、吉岡先生の放った「画家なんだって？」がどうにも耳から離れません。心、千々に乱れて、寝付けず。

スタート前、ゼッケンに記された瀬田さんの名に手を置き、目を瞑って思いを馳せました。

瀬田さま、わたくし、行って参ります。どうかどうか、どうかどうか、どうか。安らかでいてくださいますよう。わたしが、瀬田さんを守ってあげます、あげられますか？ 瀬田さん瀬田さん、瀬田さんって呼んでいいのかな？ 晃さんかな？ 瀬田さん、わたしといっしょに

支離滅裂の懸命な祈りはスタートの笛で遮られ、のこのこよぼよぼ、わたしの川の道がはじまりました。

お天気は素敵な曇り空です。これ以上日焼けをすると、穏便な社会生活ができなくなりそうなので助かりました。遮るものの全くない川べりで、直射日光は耐えがたいです。

60キロくらいまでは、それでもなんとか走れたのかな。夜が更けるのとほぼ同時に、脚の痛みが無視できなくなり、ペースが面白いように落ちはじめ、早くも睡魔が襲ってきました。眠い……。よろけながら永遠とも思われる時が過ぎました。

...警察官に職質されて目が覚めました。そのパトカーが背後からスピーカーで「頑張ってください」って励ましてくれたの、うれしかったなあ。けっこう長らく反社会派気取りだったせいで、マッポと仲良くしちゃって自分への裏切りみたいな気もしたけど、声援を受けるとどうしたって好きにならずにはいられないのでした。

もう成人して久しいし、いつまで若者のつもりだよとも思うけれど、若者は馬鹿者ってことでカミングアウトすると、他の大勢の馬鹿者と同じように、わたしも、薬物とか死とかそういうジャンルがちょっと好きだったのです、お恥ずかしい話です。それで、超ウルトラで幻覚を見たことがきっかけで、マラソンにのめり込んだのでした。死に近づける手っ取り早い方法みつけ、と思いました。マリファナよりナチュラルに幻覚！！ みたいな。

でも、走れば走るほど耐性が出来て、期待していた幻覚をみることもなくなり、何より不安定になりがちだった精神がもうびっくりするくらい頑丈になって、わたしはすっかり健全な人間に変わりました。それは、普通におとなになったということかもしれないけれど、どんどん強くなっていく自分を確認するのは純粋なよろこびでした。

でも、少しは鍛えられたはずのメンタルも、たびたび襲いかかってくる睡魔を前にして全く無抵抗でいます。非暴力、不服従ってただだっけ……。だめだよ暴力的に眠たいよ服従しそうだよ。……。ナマステ……。ジュテーム……。ヘイル ガンジー……。

眠たくない時は眠たくない時で、痛みを意識がいてしまいます。ひとりの屈強そうなランナーの方が、苦しむわたしをみて、錠剤をくださいました。今まで自分は痛みを鈍いと思っていたせいで、薬のご厄介になったことがなかったのですが、ついに痛み止めデビューです。

薬を服用すると嘘みたいに走れるようになりました。嘘みたいというか、実際それは嘘で、薬が効かなくなると同時にこときれる束の間の魔法なのでした……。

脚全体が筋肉痛だのなんだのめりめり痛いとは別に、履きつづそうと思って適当にチョイスしたポロイトレイルシューズがもう信じられないくらい痛くて、靴ひもを緩めれば少しは楽だろうに、変なところで時間を惜しんでそのまま進んでしまいました。まだその頃は、痛みを耐えることできつと強くなれる、みたいなばかげたことを考える余裕がありました。

吉岡先生とコンビニで交わした会話を思い出します。

「装備とか、休憩所でちゃんと替えるんだよ」

「うー、持ってきてないんです着替えとか靴とか」

「は？ 俺、靴、4足替えるよ」

（わー、家帰ったところで靴4足も持ってない）

「うーん、でも強くなるのが目的だから……」

「それは強さじゃないよ」

それは強さじゃないよ。それは強さじゃないよ。この後、時間の経過と共に、それは強さじゃない、という言葉が重たくのしかかってきました。自分に何がふさわしいのか、どうすれば快適に進めるのか試行錯誤して創意工夫をすることこそが強さなのだ、当たり前前の教訓が痛みの中でじりじり迫り来ました。

最初のレストポイントまでは、どうしても目をあけていられないわたしを芹沢さまが手をつないでひっぱっていただきました。感謝って百回言っても足りないです。眠たいのと痛いので、ふてくされているみたいな歩行になっていましたが、芹沢さまの励ましと、経験者ならではのコース解説のおかげで、なんとか明るいうちにこまどり荘に到着することができました。

おいしいカレーをいただいて、爆睡して、靴擦れの処置。かわいいエプロンの優しい女性が、絆創膏やら軟膏やらをたくさんいただきました。みずきさまの、「大丈夫わたしの時より全然ひどくないよ」の言葉に、思わずMぶりを発揮して「ああもってそういうことってくださっ！ 」と懇願すると、彼女は余裕の微笑みを見せておられました。かっこよす……。

ひとりで夜中の三国峠に繰り出す自信が全くないので、食堂に居合わせた田中さまと井上さまにすがりついて、金魚のフンみたいに同行させていただきます。覚醒している時はまだがんばれるけれど、眠くなるとあっけなく廃人になり、しかもだいたい慢性的に眠いという問題児のわたしを、おふたりが両脇から支えてくださり、もうこれも感謝って千回言っても足りないくらい、たくさん助けていただいてようやく峠を越えました。

次のレストポイントまでは、比較的短い区間です。靴屋さんで、990円の糞みたいなウォーキングシューズが500円に値下がりしていて、思わず購入。エイドに着いて早く履き替えたい一心で歩を進めましたが、とっぴり陽も暮れ、痛みを引きずってしょぼり歩きました。

脚はパンパンに腫れていて、タイツを脱ぎ履きするなら1時間くらいかかりそうな気配です。お風呂に入る時間があるなら少しでも睡眠に充てたくて、迷わず寢室に直行しました。

—— 若葉の萌える沢で、脚を焼かれる夢をみた。丘にはミュージミみたいな格好のみずきさんが立っていた。

火照った脚の痛みで目覚めました。わかりやすい夢でありました。

出発しようと思ったばかりの靴を履いたけど、冷静になってみると、かたくてすごく痛い。わたし、ムキになってないかな？ 今まで履いてたトレランシューズが憎すぎて、誤った選択をしようとしていないかな？ この靴で、半分まで来られたじゃない。じゃあきつと、後半だつてがんばれるよ。でしょう？

とはいえ、靴ひもを結ばず最大限にゆるめても、痛くてとても履けたものではありません。ホテルのフロントでハサミを借りて、親指と人差し指のあたりをズタズタに切り裂きました。いたいけな娘を陵辱しているみたいで加虐心が満たされ、すっきりしました。自分に潜むS要素を知りました。

最後の関門まで、135キロ。ここをクリアしたら、ぐんと完走が近づくと聞いて、今日が最終日のつもりで頑張ろうと決めました。

吉岡先生特製の素晴らしい地図に導かれ、ここまで迷うことなく進めています。先生が3位から2位にあがったという朗報にウキウキしていたら、急転直下、膝を傷めてのリタイアを知りました。頭がぐらんぐらんします。どうしよう。別にどうもしないんだけどどうしよう。せんせい〜。

わたし吉岡先生のぶんまで、ゴールしますきつと！ そういうの全然意味ないけどダサいけど！ わたしのひとりよがりにも今しばし付き合ってください、先生お願いします。リタイアのお力を、どうか貸してください。

たびたびコンビニのトイレにへたりこんで眠りながら、難関と呼ばれる山越えを前にするところまで来ました。マウントフジに出ていらっしゃる中島さまについていこうと試みるも敢えなく離脱。ぺたぺた走ったり、ふおーと路肩で眠ったりを繰り返しているところへ、元気なランナーの方が...お名前布施さままで合ってるでしょうか、たぶん布施さまが、もうちょっとがんばって！ とビシバシ暖かい指導で併走してくださいました。おかげでいい感じで進んでいると木の根に足をとられ転倒。ビッターン！！ と効果音が吹き出しでつきそうな漫画的なすっころび方でした。

血の味がする……。血がしたたっている……。おろおろ。極度に鼻が低いせいで口をやりました。過去、自転車で転倒した時にほぼ同じ場所を、縫うほど大怪我しています。その時とは比べものにならない軽傷なのが痛みの質でわかると安心できました。膝も手も打ったけれどどちらも大したことなく、何の呪いかレースを続けることができました。

転んだせいでこれでシャキッと目覚めるかという、わたしに取り憑いている睡魔はそんな甘っちょろいものではなく、それはそれは執拗に絡んできます。やめてよ粘着質、なんでもいうこと聞かから許して、と願ったけど相手が要求しているのはただもう十分な睡眠で、そしてそれこそが、ペースの遅いわたしがどうしても譲り渡せないものなのでした。

遠くで 光がまわっています。なんだろういよいよ幻覚かなー？ 導かれて進むと、ちょっと寝ていって！ と暖かい車内へ誘導されました。ご夫婦で仮眠所をしつらえていらっしゃる石坂さまとおっしゃる方でした。どうやら、先へ通ったランナーの方々が、あとからふらふらの負傷兵が来るからなんとかしてやってくれと話をつけてくださっていたようです。

「何分寝る？」

「20分」

「30分にしたら？」

「30分」

「パン食べる？」

「ありがとうございます」

自分の意志なし。パンをひとくち口に入れたまま、すーっと眠っていました。窒息しなくて良かった。

夢うつつで、明るくなるまで寝ていたら？ という会話をしたらしく、結局2時間ほど眠ったようです。夜明けとともにレースに復帰しました。睡眠の力は偉大なもので、久しぶりにきもちよく走れたような気がしました。

最大の難所と思われた第3レストポイントの鹿渡館にどうやら辿り着けそうなのがうれしくて、つい気が緩んで山菜などを買ってしまいます。この時はもう、早くも川の道を制覇した気分で浮かれていたのです。なまぬるい歓喜に浸っていた自分に、こっからが本番だよバーカ！ と、伝える術をわたしは持ちません。悲劇だと思います。

ただ、えみさんの網タイツの太ももが眩しく、いい夢が見られそうでした。見られなかったけど。

ちなつさまに、13時に出発したら、ゴール間に合いますか？ と尋ねると、「その脚でしょう？ 早ければ早いほうがいい」と諭されて、気持ちが一変しました。この、短い会話があるとないで、完走できるか否かが大きく変わったように思います。

お昼には出発したのに、大して距離を稼げないうちに夜が訪れました。それでも、夕刻、応援の堺さまの逆走ランに出くわした時は、知っているお顔に会えたのがとてもうれしくて、一瞬むくむく元気が湧いて、なんだか完走できる気がしていたのでした。

が、ついに激痛に我慢できなくなり、嗚咽しながら走っていると、男女ふたりのランナーが薬をくださって併走までしてくださいました。わたしのペースはいよいよ遅くなっていて、本当にご迷惑をおかけしました。和田エイドは6キロ先くらいだったでしょうか。あほみたいに時間をかけて、和田さまのもとにくずおれました。

ご飯をいただいて、少し眠って、それから薬が効いてきて、わずかに距離をのばせたけれど、また睡魔に捕まりました。耐えて進むのも限界で、屋根つきのおうちみたいなバス停に入り、ベンチに体を横たえました。と、車からどなたか降りてこちらにやってきます。黒い服のお兄さんでした。何をやっているのか聞かれるままに一通り説明すると、呆れながら「車で寝ていきなよ」と勧めてくださいます。しかしそこは迷わずに、お話して眠気も覚めたし先を急ぎます、と答えることができました。

でも。またすぐ眠くなって蛇行歩行、次のバス停でぐったりのびる、の繰り返しです。するとさっきのお兄さんがまたしても出現。……わ、わたし、つけられてる？ 「あはははトロみたいに寝てる」って笑ってらっしゃるけど、わたし眠いの眠いのお願いどうかわたしをここで静かに寝かせてください。「風邪ひくよ。車、あったかいよ」。これ、ここで拒んでも3度目あるなと思って、思って、お兄さんこわい人じゃないですか？ って確認して、確認して、腹を決めてふらふら乗車しました。もし、何かこわいことがあったらその時は意識を失えばいいし、今意識を失うのはいともたやすく思われました。

結局、お兄さんはやさしい人で、わたしはちゃっかりぬくもりの空間を享受して回復できました。はー、よかったよかった。……って、何もなかったことを 妙齢の女子としては無邪気によるこんでいる場合ではないのかも。全身から漂う自分のホームレス臭と、犯罪的な足の腐臭を憂うべきなのかも。……合掌。

夜明け。

全然進んでいないと悲観していたけれど、少なくとも後退はしていません。じわじわ、だけど確実にゴールは近づきつつあります。

ただ、もうあちこち痛くて痛くて……。痛みをAKBになぞらえて、ITM48などをつくってみました。まず序盤から苦しんだ右足脛の強烈な芯の痛み。そして追って出てきた左足脛の全く同じ痛み。これを、あっちゃんとゆうこのツートップとします。足が進まないせいでせめてもと思ってぶんぶん振り回していた腕の骨も、しくしく痛みます。これは新世代のぼるとまゆゆで。寝違えたみたいになった肩はさしこかなあ。おなか痛いのはこじはるあたりか。足裏のママは親指がらぶたんで…。

痛いのを、撃退しようとするから、かえっておもしろがって痛みがついてくるのではないかな？ ああわたし愛されてるなあと思って、よろこべないかな？ もうよいもうよい、そんなにここが気に入ったなら、いつまでもここに居ればよい。って言ってあげられたら、なんか胡散臭いと思ってどっか行ってくれるんじゃないかな？ 大好きよって言えたらお互い楽になるんじゃないかな。

手を替え品を替え、痛いのと付き合う方法を考えましたが、もうITM48とか言って遊ぶ余裕はどこにもなく、ただ着地のたびに意識がとびそうな痛みだけがありました。両足脛、つまりツートップがあまりに激烈に痛むせいで、他のメンバーが霞んでしまったのは良かったといえば良かったところです。

痛すぎる、前に進めない……。

残り時間、残り時間、距離、どう！！ ぎりぎり！ 時間内完走、できないかも！ ダーっと泣けてきました。

今ここで落第したくない！！ 完走して卒業しなきゃ！！

自分の性格上、クリアできるまでは毎年トライするように思われました。もう、ぜったい戻ってきたくない。ゴールしたい……。

でも進めません。全速力で走っているつもりなのに、歩きの人たちにひょいひょい抜かれていきます。気が遠くなりそうな新潟市の道路の直線と、たぶんすごく緩いんだけど疲労体には激坂に感じられる上り。

あきらめよう、無理だよ、こんな痛くて、もうとっくに限界じゃん。白い服の女の人がにやにやこちらに向かってきました。あー天使か？ わたしはあきらめたから天に召されるのか？ にしても天使のくせになんなんだその邪悪な笑みは、と思っていたら、ゴールで待っていてくれるはずの新潟在住の友人でした。

和久井さあああああん！！

何やってんの！ なんで来たの！ まだあと30キロあるんだよ！ 30キロ歩いたことあるの！？

ごうごう泣きながら問いつめました、和久井さんは涼しい顔で、さあ行くよーとのんびり歩きははじめます。

懸命についていこうとするわたしのもとに、もうひとり女神が現れました。他のランナーの伴走をされていたおしゃれな女性です。それまで幾度かへばっているわたしに声をかけてくださっていたのですが、なんとロキソニンを持ってきてくださったのでした。周りのランナーの方に声をかけて、入手されたのだそう。つらいのはみんな同じなのに……。これが泣かずにいられようか、否。自分の元来の性格の悪さが激しく悔やまれました。真人間になりたいと思いました。

いただいたロキソニンを3錠いっぺんに服用。痛みはあっさり和らぎました。和久井さんは、たまに振り返って、「いいペースだよー」「間に合うよー」と、その口調こそんびりだけれど、ゼーゼー息を荒らげるわたしを気づかってペースを落とそうとは全くしてくれません。和久井さんが鬼ってことは知っていたけど、本当に殺されるかと思いました。和久井さん、なんであんなゆっくり歩きなのにわたしは走っても追いつけないんだろう。ウインドーに映る自分を観察すると、びっくりするくらい狭い歩幅なのでした。なんだこりゃー。めちゃくちゃ脚ひらいてたつもりがこんなだったのかあ。そりゃあ進まんわ。そこからは股関節を動かすことを意識して、文字通り死ぬ気で進みました。

和久井さんのスパルタコーチの甲斐あって、あと10キロ、残り3時間強のところまでできました。もう大丈夫……安心した途端に脚が止まって、和久井さんに寒い思いをさせました。

川べりを歩いていると、うしろから布施さまがいらした！ 終盤、肉離れを起こしたとおっしゃっていたのでとても心配していたのですが、ちゃんと走っている！！ 見事！ さらにその時、先ほどロキソニンを差し入れてくださったのも布施さまだったということがわかりました。沿道でコーラを振る舞っていた奥さまは超かわいいし、最高のご家族でございました。

海まだ？ 海まだ？ 橋あといくつ？

もうちょっと、もうちょっとだよ。

夕日はとうに沈んで、ネオンが川面に穏やかです。

瀕死のわたしに、もうすぐエイドです！ と、スタッフの方が付き添ってくださいました。

あー

海だあー……………。

叫ぶ元気なんて到底ないし、ルールの写真撮影だってきついくらいで、ほんの少し日本海を一瞥しただけで、うなだれてしまいました。

ここまでわたしはどれだけの人に助けてもらった？ どれだけ迷惑かけた？なのに、何も返せてないね。どうにか、役

にたてなかったの？ ずっと自分自分だったね。自分の痛いのはっきりだったね。ケロツと走れないなら、無理すべきじゃなかったと思う。猛省してください。

ゴールまでの4キロは、ゆっくり静かに過ぎました。早く早く、早く終わってくれと思っていた川の道だけど、大好きな和久井さんといっしょに歩く時間の終わろうとしていることが、しんしん寂しく胸をうちました。

和久井さんがいなかったら、とてもこ こまで来られなかった…。だれがいなくてもここまで来られなかった。ずっと、完走／リタイヤのぎりぎりまで踏みとどまってきたけれど、リタイヤしたれかにはわたしだったかもしれない、完走できるのはわたしじゃなくだれかだったかもしれない。そのほんの僅かの差を「運」と呼ぶのなら、もう頭を下げるしかないというか……。自分が生き延びていることで傷ついている方もきっといることを、わたしは忘れてはならないと思いました。幸運の報いはきっとありますから。大丈夫です。

……こういう回想も、或いは青くさすぎて見ていられないかもしれませんね。同感です。すみません。

ゴールテープの向こうで、えみさんがそっとやさしく抱きとめてくださいました。

きゃーわたしお風呂入ってない臭い汚いごめんなさいと思って硬直しかけたけれど、「くるみちゃんはどうしているかってずっと気にして、いろんな人に尋ねていたんだよ」の言葉に、はらはら涙がこぼれました。

自分は人を不快にさせているに違いない、と卑屈になる癖のせいで、初対面では上手に笑えなかったし、ちゃんとしゃべれなかったし、なのにそんなふうに思っていてくださったことに虚をつかれて、「わたしもえみさんに早く会いたかったです」って言えなかった……。

お世話になったスタッフの方々、ランナーの方々に、どうやって感謝を表したらいいのかわかりません。ただ、夢みたいな、幻みたいな6日間をくださったこと、本当に本当にありがとうございました。

翌日、起き上がることができず病院へ行くと、骨膜炎でした。仕事を悠々と休みまくって未だに周囲に大迷惑をかけ続けています。

これからは、もうちょっと、しっかりしないとイケないです。

反省して、成長して、少しずつお世話になったみなさまにご恩を返していけるようになりたいと思います。

(お名前のまちがいがあつたらごめんなさい！！)

2013年5月10日